

## 青年期の離人感に関する研究

松下姫歌 京都大学大学院 教育学研究科

### 要約

木村敏の存在構造論の視点から、青年期の離人感の質的側面について質問紙法により検討した。その結果、次のことが明らかにされた。青年期の離人感は、「世間一般性」忌避的な自己指向性と深く関わる。その全体的傾向のなかで、「未来的自己指向性」に関わるものと「既在的自己指向性」に関わるものの、二つのタイプに大別される。前者は《存在感喪失》《二重意識と自己の連続性喪失》であり、「他」と「他ならぬ自己」を成立させるはたらきであるノエシス面を追求することで生じる離人感である。後者は《感覚疎隔感》《自他の疎隔と自己の産出面との疎隔》であり、メタノエシス面のはたらきが既在的自己としてのノエマ化に傾き固定化されることで、ノエシス面とノエマ面との間にズレが生じておこる離人感である。ズレがありながらもノエシス面が自己化されるという「他者の自己化」を孕むものの、自己の成立は自明のものであるという点で、前者のような自己の成立の根本的な喪失が問われる事態とは質が異なる。

キー・ワード：離人感、存在構造論、メタノエシス面

### I 問題と目的

#### 1. 離人症の本質理解の問題へのアプローチとしての木村敏の存在構造論

離人症は正常範囲においても見られる他、多様に複雑化したかたちで広範に精神疾患のなかに分布している。その本質理解は諸家により異なり、そのため、さまざまな質の症状が「離人症」の名の下に一括されていることが指摘されている。

この点に関し、木村は、従来の症候論的な疾病分類による症状や状態像のみからは病像を動かしている基本構造を捉えられないことを指摘、病態水準の区別を超えた成因論的共通性を有する基本構造への視点による質的な区別の必要を提唱し、三つの基本的存在構造、すなわち、①アンテ・フェストゥム構造：自己の未知の次元での実現を求める分裂病親和的存在様式、②ポスト・フェストゥム構造：自己の完了態的な未済の回復不能性を恐れるうつ病親和的存在様式、③イントラ・フェストゥム構造：自己が一瞬一瞬の現在における主客未分の根源的自発性と即自的な急性転機親和的存在様式、をあげている（1976a, 1979, 1982,

1988 他）。

ここで言う「自己」とは、「それ自身に関わる一つの関係」であり、「ノエシス的な差異化のいとなみが、それ自身との差異の相関者としてのノエマ的客体を産出し、逆にこのノエマ的客体を媒介としてそれ自身をノエシス的自己として自己限定するという、差異の動的構造」（木村, 1979）である。

「ノエシス」面とは「個別化以前の根元的で無限定な自発性」（木村, 1979）である。主客未分の根源的自発性であるノエシス面が自らを「他」と「他ならぬ自己」とに分離することが「差異化」であり、差異化により産出され意識にのぼった表象面が「ノエマ面」である。ノエシス面が自らを差異化することはすなわちその差異の相関者としてのノエマ面を産むことである。自らを自他差異化することでノエシス面は自らを「自己」としてつかみとる。これが「自己限定」である。また、ノエシス面によるこのような「自己限定」のはたらきは、ノエシス面が、自他差異化によりノエマ面を産み出すことで、ノエシス面自身を、統

合的につかみ直すはたらき、であるため、このはたらきの側面を「メタノエシス面」という。

このように、一瞬一瞬の現在において自己を成立させるはたらき自身を、そのはたらきを通して、「他」と「他ならぬ自己」としてつかみ直し続けることで、「他者」と「自己」が成立し、リアリティをもって体験される。

木村の三つの存在構造は、このような、リアリティをもった自己や他者の成立と体験にむけてのいとなみにおける、三つの契機として抽出される。ノエシス面が自らを捉えるべく他性を排除することで差異化し、自らのノエマ面を産み出そうとする契機がアンテ・フェストゥムの構造契機である。すなわち、ノエシス面が、自らの内の他性を排除することでより純粋な自己自身を捉えようとする動き、未だ獲得されない「他ならぬ自己」を追い求める動きである。そのつどの現在においてノエシス面は自他差異化しノエマ面を産む。ノエシス面が、自らの性質の輪郭を「ノエマ的自己」として捉えた瞬間、そのはたらきそのものが「ノエシス的自己」として獲得される。しかし、その瞬間、捉えられた自己は「既在性」を帯びる。ノエシス面が自他差異化によって産み出した「既在的」なノエマ面は、さらなる自他差異化によってさらなる「他ならぬ自己」を捉えようとするはたらきに対する制約となる。この契機がポスト・フェストゥムの構造契機である。この二つの存在構造の不均衡による一方の尖鋭化が、各々の極限状態として分裂病、うつ病という病像をとりうる。イントラ・フェストゥム構造は、上の二つの存在構造を可能にする根源的な位置を占め、この尖鋭化は「一つの方向をとらない底抜けの事態」で、病像の「非定型性」に関わる。

松下(1998)は、この三つの存在構造の尺度化の試みを通して木村の存在構造論を再検討した。その結果、木村の論ではアンテ・フェストゥム構造に含まれる「未来的自己」指向性と、ポスト・フェストゥム構造に含まれる「既在的自己」指向

性が、相互に独立な概念として抽出された。加えて、木村のアンテ・フェストゥム構造とポスト・フェストゥム構造に各々含まれる「世間一般性」忌避的な自己指向性と「世間一般性」親和的な自己指向性が、互いに正反対の指向性として抽出された。

以下、便宜上、「未来的自己」指向性をA構造、「既在的自己」指向性をP構造、「世間一般性」忌避的な自己指向性対「世間一般性」親和的な自己指向性の契機をA-P構造、イントラ・フェストゥム構造をI構造と呼ぶことにする。

## 2. 存在構造論の視点からの木村敏の離人症論の再検討と本研究の目的

木村(1978)は、離人症はその好発期である青年期に特徴的なI構造の急激な突出とA構造の尖鋭化に基づき、ノエシス面のはたらきが自己意識として立ち現れてくることから、自己が応急的にメタノエシスの機能を停止しノエシス的自己を消去した事態が生じるとしているが、その移行がいかにして生じるかについてはほとんど説明がない。この点について存在構造論の視点から検討する。

I構造の突出は、ノエシス面が自らをほとんど差異化できず、ほぼはたらきそのものとしてのノエマあるいは自他未分のものとしてのノエマしか産み出せない状態と考えられる。それゆえ、直接的なはたらきの感覚やある種の生々しさや実感を得ることはあっても、どこか捉えきれない何かが含まれているような体験となり、そのためノエシス面の自他差異化とつかみ直しへの動きというA構造が生じると考えられる。しかし、ノエシス的にはたらきはそこから自己にとっての自己や他者が成立してくる源泉であるため、その自他差異化は本質的に困難である。ゆえに、ノエシス面は自らを捉えようとするほど、自らを自己限定するに足るノエマ面を産むことが困難となり、ノエシス的自己として体験されえない。このことがさらにA構造を尖鋭化させる。この事態は、メタノエシス的にはたらきの停止によるノエシス的自己の消去と

いうよりは、メタノエシス的はたらきの不全によってノエシス面が自己の相で捉え損なわれている事態とよぶべきであろう。したがって、離人症とは「青年期におけるノエシス面の自己の相への急激な浮上によるノエシス面の自他差異化への動きが、逆説的にその自己限定を困難にすることで尖鋭化したメタノエシス面の機能不全により、ノエシス面が捉え損なわれている事態」といえる。

一方、うつ病や退行期における離人症については、木村は「うつの部分症状としての感情喪失感」で狭義の離人症とは異質であると述べるにとどまっている。P構造の尖鋭化によって離人症は生じうるであろうか。P構造の尖鋭化は「ノエマ的自己としての自己限定の優位」「ノエマ的自己によるノエシス面差異化の支配」の尖鋭化である。この事態では、自己は「ノエマ的」「既在的」に成立し、A的な自己の成立の問題は自明的にクリアされている。一方、そのような自己の成立の動き自体の自己化への傾きは、自他差異化の精度の低さによる「他者の自己化」を逆説的に孕む。そこに既在的自己のノエマ面によるメタノエシス面の自己限定の固定化が生じ、本来のノエシス面の自己生成的なはたらきによるそのつどの新たな自己言及が困難となる。A的なそれとは質の異なる離人症が生じうる。

また、I構造はA構造とP構造の源であるノエシス的自発性に即自的な構造であるため、そのありようは、一方の構造への突出によりノエシス面が自己としてつかめなくなる体験である離人症の高さや質に関わると考えられる。

これらの基本的存在構造とは、上述したような、ノエシス面が自他差異化によりノエマ面を産み出すことでノエシス面自身を統合的につかみ直す「メタノエシス的」はたらき、すなわち、自己にとってリアリティをもった自己や他者を成立させるいとなみ、のなかの各構造契機のバランスのありようが、一瞬一瞬の現在における存在構造として捉えられるものであり、全体的な存在様式の傾

向として捉えられるものである。言い換えれば、基本的存在構造として捉えられる各構造契機のバランスのありようが、自己や他者などの体験のリアリティの質に深く関わっていると考えられる。よって、上に見てきたように、離人症の体験の強さや質は基本的存在構造のあり方によって異なると考えられる。

本研究では、離人症のうち、青年期心性の一つとして正常範囲内でも一時的・瞬間的には感じるもののあるものを「離人感」としてとりあげ、その質やリアリティの理解へのアプローチとして、離人感と基本的存在構造との関係を調べることを目的とする。

## II 方法

調査対象 大学生 231 人 (平均年齢 19.140 歳、標準偏差 1.036 歳)。

### 調査材料

#### (1) 離人感質問紙

離人感質問紙は次の手続きで独自に作成した。

予備的質問紙の作成：離人症に関する臨床記述(井上, 1956, 1957 ; 木村, 1976a, 1978, ; 中安, 1989 ; 小川, 1965 ; 大橋, 1978 ; 新福・池田, 1958 ; 清水, 1965 ; 山中, 1978 ; 安永, 1987 ; 湯沢, 1992 他)を参考に、離人感特有の体験内容の表現として適切な言葉を抽出するよう留意し 40 項目を作成した。具体的には、外界意識面、身体意識面、自我意識面についての離人感としての、実在感喪失、自己喪失感、有情感喪失、疎隔感、親和感喪失、実行意識喪失、自己所属感喪失、二重意識、などに関する項目をできるだけ偏りなく作成した。

予備的質問紙の項目選定と修正：まず、予備的質問紙を京都大学臨床心理学教室の院生および相談室スタッフ 40 名に施行した。その上で、離人感の概念についての説明文を読んでもらい、各項目の内容的妥当性と言語表現について、「適切」か「適切でない」かの 2 件法で評定してもらった。

「適切でない」場合はその理由を付記してもらった。他の適切な項目案についても回答を求めた。

その結果、「適切でない」という評定が1名でもあった項目については次のように検討した。本質的に「適切でない」と評定された3項目は削除した。部分的な言語表現が「適切でない」と判断された4項目は表現を改良し、これらを含む37項目を採択した。加えて、適切な項目案16項目について、臨床心理学を専門とする教官2名と協議の上、うち14項目を採択し、最終的に計51項目を採択した。

## (2) 存在構造尺度 (松下, 1998)

木村の存在構造論をもとに、離人感質問紙と同様の手続きで作成・選定した項目に基づき、因子分析の結果得られた、P尺度(既在的自己指向性)、A尺度(未来的自己指向性)、A-P尺度(「世間一般性」忌避的な自己指向性)、I尺度(イントラ・フェストゥム性)の四つの下位尺度からなる。

手続き:上記のように独自に作成した離人感質問紙と存在構造尺度(松下, 1998)の質問紙を、大学の一般教室で集団法により施行した。いずれの質問紙も、各項目について自分に「全然あてはまらない」=1, 「あまりあてはまらない」=2, 「どちらかというにあてはまらない」=3, 「どちらかというにあてはまる」=4, 「ややあてはまる」=5, 「かなりあてはまる」=6, の6件法で評定してもらった。

## III 結果と考察

### 1. 離人感尺度について

まず全51項目について因子数を指定せずに主成分法で因子分析したところ、第1因子の固有値が12を超え、第2因子以降の固有値が2.054以下と小さい値であったため、この尺度を基本的に単因子尺度とみなし、因子数=1で因子分析した。因子負荷量.4未満の項目を除外し43項目を採択した。 $\alpha$ 係数は.941で内の一貫性は高い。離人

感尺度は基本的に一つのまとまった主観的体験として離人感をはかる尺度と捉えられる。次に、その内的構造の検討のため、固有値と解釈可能性を考慮し、43項目について因子数=5で因子分析した。因子負荷量.4未満の項目を除外し、《存在感喪失》(10項目)、《有情感喪失》(11項目)、《感覚疎隔感》(7項目)、《自他の接点の疎隔感あるいはノエシス面との接点の消失感》(5項目)、《二重意識と自己の連続性喪失》(5項目)の5因子を抽出した(表1)。

### 2. 離人感の高さおよび質と存在構造の関係について

#### 1) 離人感の高さと存在構造との関係

離人感の高さと存在構造の関係を調べるため、各存在構造尺度の尺度得点について、中央値によって上位群(H)と下位群(L)に分け、離人感得点(DS)について、P(既在的自己指向性) $\times$ A(未来的自己指向性) $\times$ A-P(「世間一般性」忌避的な自己指向性) $\times$ I(イントラ・フェストゥム性)の4要因2水準の分散分析を行った。その結果、P, A, A-Pの主効果とA $\times$ A-P, P $\times$ A $\times$ Iの交互作用が見られた(表2, 表3)。

(1) P, A, A-Pの主効果はすべてHがLよりDSが有意に高い(各々,  $p < .005$ ,  $p < .0005$ ,  $p < .0001$ )。離人感尺度で測られた離人感を、一つのまとまりをなす体験として捉えた場合、その離人感の高さには、「既在的自己指向性」(P), 「未来的自己指向性」(A), 「世間一般性」忌避的な自己指向性(A-P)の高さに関わるが、一つのまとまりをなす体験のなかに、微妙にニュアンスの異なる体験が混じり合っていることをも示唆する。この点については、離人感の質の問題として後に検討する。

(2) A $\times$ A-Pの交互作用( $p < .0001$ )はHH, HL, LHがLLに比して有意にDSが高い(Tukey法による多重比較)。A, A-Pの主効果を基本的に支持するが、Aのみが高い場合、A-Pのみが高い場合、A $\cdot$ A-Pの両方が高い場合、

表1 離人感尺度 因子分析 (主成分解・因子数=5・varimax 回転後) の結果

	F1	F2	F3	F4	F5	
<b>F1 「存在感喪失」</b>						
12 自分の心と身体が離ればなれになってしまったような感じがすることがある。	.691	-.006	.144	.147	.265	
51 自分は存在していないのではないかと感じる事が出来る。	.595	.013	.252	.030	.318	
18 自分自身が自分でなくなったような、他人のような感じがすることがある。	.578	.220	.005	.236	.301	
7 よく知っている人が、いままでと変わったところがないのに、まるで知らない人のように感じられることがある。	.569	.057	.088	.355	.013	
28 身体全体が借り物のようで、自分の身体でないような感じがすることがある。	.549	.346	.119	.130	.195	
13 誰かの隣にいても、その人の横にいたいという感じがしないことがある。	.548	.199	.203	.219	.179	
40 手や脚や頭などが自分のものでないように感じる事が出来る。	.547	.376	.293	-.076	.052	
1 まわりの人やものがそこに「ある」という実感が、いま一つないことがある。	.509	.240	.045	.099	.053	
3 自分の身体の中身がスカスカになってしまったような感じがすることがある。	.492	.059	.163	.141	.287	
9 人と話していても、間に何かペールやガラスを通して話しているような感じがすることがある。	.478	.333	.066	.418	.010	
11 温度の違いはわかるが、「暑い」とか「寒い」ということが、いまひとつわからないことが多い。	.401	.177	.384	.021	-.104	
(17 歩いていても宙を踏んでいるような感じがすることがある。	.387	.355	.254	.258	-.114	
<b>F2 「有情感喪失」</b>						
16 何を見てもリアルな感じがしないことがある。	.239	.656	-.026	.262	.032	
19 風景を見ても、スクリーンのように、生き生きと感じられないときがある。	.244	.592	.161	.185	.051	
41 音楽を聴いても音だけ聞こえる感じがしたり、絵を見ても色や形だけ飛び込んでくる感じがしたりして、その音楽や絵の世界が感じられないことがある。	.104	.587	.314	.066	.112	
42 つねたり叩いたりしても、痛いのかどうかよくわからないようなときがある。	.340	.558	.326	-.241	.043	
45 自分の身体を動かしていても、自分が動いている感じがしないときがある。	.361	.525	.272	-.126	.241	
27 人が何かしているのを見ても、動いているのが目に映るだけで、その人が生きてるように感じられないときがある。	.216	.504	.250	.066	.056	
23 心から笑ったり、怒ったり、泣いたりすることが、あまりない。	.034	.493	.002	.245	.296	
39 人と話していても、鏡に向かって話しているように感じる事が出来る。	.308	.471	-.053	.140	.252	
21 ドラマを見ても、一つ一つの場面が目映るだけで、ストーリーが頭に入らないことがある。	.053	.451	.263	.111	.132	
14 見慣れた文字が、見知らぬ奇妙な文字に見えることがある。	.039	.436	.199	.170	.066	
5 体験をふりかえっても、それが自分の体験ではないような感じで、本当にあったことではないような気がする事が出来る。	.139	.420	.036	.205	.341	
(46 親しいはずの相手でも、よく知らない人と同じくらいの親しみしか感じられないことがある。	.287	.363	.208	.156	.315	
<b>F3 「感覚疎隔感」</b>						
48 そこに何か物があるとわかっていても、身体がそれにぶつかってしまうことがよくある。	.111	.059	.627	.114	.168	
33 食べていても味がわからないようなときがある。	.241	.173	.621	.061	-.004	
31 何となく、空間の奥行きや、ものの重さが実感できないときがある。	.281	.234	.560	.237	-.095	
47 昨日何をしていたか思い出しにくいことがある。	.068	.233	.557	.119	.237	
49 特に睡眠不足や疲れがあるわけでもないのに、頭が働かないような変な感じがすることがある。	.170	.038	.551	.235	.309	
25 時間の流れがわからなかったり、季節感が実感されなかったりする。	.163	.138	.523	.176	.024	
34 いつものように行動していても、人形か機械のような感じで、「自分がしている」という実感がなくなることがある。	.309	.280	.505	.340	.174	
(32 大変な目にあっても、その「大変さ」がどこかピンとこないことがある。	.051	.337	.384	.232	.154	
<b>F4 「自他の接点の疎隔感あるいはノエシス面との接点の消失感」</b>						
22 まわりの感じが自分にピタッとこないことがある。	.071	.140	.149	.621	.188	
10 何かやろう、という気がなくなってしまうことがよくある。	.199	.100	.100	.608	.087	
35 話を聴いていても、言葉が耳を通り過ぎていくように感じる事が出来る。	.112	.200	.352	.571	.138	
36 自分とまわりの世界とがうまくつながっていない感じがすることがある。	.202	.127	.308	.565	.388	
8 連想がまったくわなくなることがある。	.180	.156	.303	.432	-.115	
(24 よく知っている物事なのに、何か初めて体験する、なじみのないことのように感じる事が出来る。	.163	.338	.200	.367	.109	
<b>F5 「二重意識と自己の連続性の喪失感」</b>						
44 昔の自分といまの自分が別人のような感じがする。	.185	.070	.209	-.039	.770	
38 そのときによって、自分のいろんな面があらわれるので、どれが本当の自分かわからなくなる。	.119	.178	-.026	.247	.602	
43 自分のなかに、考えたり、行動したり、話したりしている自分を、じっと見つめているもう一人の自分がある。	.278	.232	.098	.049	.594	
29 思ったことや考えていることを言っても、本当にそんなことを思ったり考えたりしているのかどうか、よくわからなくなることがある。	.197	.198	.111	.377	.480	
30 まわりの世界が、自分とはまったく関係なく動いているように感じる時がある。	.288	.177	.270	.347	.419	
	固有値	4.848	4.555	3.908	3.397	3.105

表2 存在構造尺度の下位尺度得点(P, A, A-P, I)の上位群(H)下位群(L)における, 離人感尺度の全体得点(DS)および各因子得点(DS1~5)の平均値, ならびにその群分けに基づくP×A×A-P×Iの4要因分散分析の結果有意差が見られたもの〔 $F$  ( )内は標準偏差

P	DS 平均値	DS1 平均値	DS2 平均値	DS3 平均値	DS4 平均値	DS5 平均値
H (n=124)	128.2(34.04)	26.2(9.74)	26.0(8.82)	20.8(6.77)	19.6(4.65)	14.8(4.90)
L (n=107)	116.4(31.44)	24.0(8.75)	23.5(7.51)	18.2(6.14)	17.7(5.38)	14.1(4.82)
	$F=9.66 p<.005$		$F=6.56 p<.05$	$F=11.4 p<.001$	$F=9.90 p<.005$	
A	DS 平均値	DS1 平均値	DS2 平均値	DS3 平均値	DS4 平均値	DS5 平均値
H (n=117)	131.5(28.64)	27.7(9.32)	26.1(7.88)	20.5(6.29)	19.4(4.80)	16.2(4.07)
L (n=114)	113.7(35.43)	22.6(8.69)	23.5(8.57)	18.6(6.79)	18.0(5.29)	12.7(5.04)
	$F=13.11 p<.0005$	$F=13.97 p<.0005$	$F=4.52 p<.05$		$F=24.72 p<.0001$	
A-P	DS 平均値	DS1 平均値	DS2 平均値	DS3 平均値	DS4 平均値	DS5 平均値
H (n=128)	133.4(31.72)	26.9(9.07)	27.1(8.42)	21.8(6.60)	20.0(4.99)	15.6(4.64)
L (n=103)	109.5(30.50)	23.0(9.28)	22.0(7.25)	16.8(5.49)	17.1(4.76)	13.1(4.82)
	$F=36.73 p<.0001$	$F=9.56 p<.005$	$F=26.85 p<.0001$	$F=38.79 p<.0001$	$F=21.10 p<.0001$	$F=13.83 p<.0005$
A×A-P	DS 平均値	DS1 平均値	DS2 平均値	DS3 平均値	DS4 平均値	DS5 平均値
HH (n=71)	134.4(29.57)	27.2(8.89)	26.9(8.12)	21.9(6.29)	19.6(5.16)	16.4(4.17)
HL (n=46)	127.2(26.88)	28.3(10.01)	24.8(7.39)	18.4(5.73)	19.2(4.22)	15.8(3.93)
LH (n=57)	132.2(34.45)	26.4(9.36)	27.4(8.84)	21.6(7.03)	20.6(4.76)	14.6(5.03)
LL (n=57)	95.2(25.47)	18.8(5.89)	19.7(6.32)	15.5(4.98)	15.5(4.57)	10.9(4.34)
	$F=15.46 p<.0001$	$F=15.27 p<.0001$	$F=7.41 p<.01$		$F=12.81 p<.0005$	$F=8.34 p<.005$
多重比較	HH, HL, LH>LL		HH, HL, LH>LL	HH, HL, LH>LL	HH, HL, LH>LL	HH, HL, LH>LL
P×A×I	DS 平均値	DS1 平均値	DS2 平均値	DS3 平均値	DS4 平均値	DS5 平均値
HHH (n=43)	138.8(28.31)	29.8(9.44)	27.3(8.89)	21.7(5.96)	20.5(4.00)	16.8(3.87)
HHL (n=23)	127.4(32.29)	25.8(9.08)	26.7(7.58)	19.9(7.18)	20.9(5.57)	15.0(4.44)
HLH (n=23)	114.9(33.63)	21.9(8.80)	22.7(8.62)	21.0(7.99)	18.6(4.35)	12.1(5.23)
HLL (n=35)	124.6(38.98)	24.8(9.93)	26.0(9.43)	20.0(6.71)	18.4(4.45)	14.1(5.24)
LHH (n=34)	125.2(26.85)	26.3(9.81)	23.9(6.97)	19.4(6.00)	19.5(5.55)	16.1(4.28)
LHL (n=17)	131.5(26.85)	27.4(7.89)	26.9(6.90)	20.5(6.45)	19.2(4.98)	16.3(3.57)
LLH (n=19)	116.8(30.28)	24.3(7.62)	24.4(6.95)	18.5(5.90)	16.4(4.73)	13.3(4.38)
LLL (n=37)	101.1(32.74)	20.1(7.36)	21.2(8.04)	15.8(5.66)	14.6(4.73)	11.7(4.93)
	$F=8.42 p<.005$	$F=7.44 p<.01$	$F=6.19 p<.05$		$F=5.85 p<.05$	
多重比較	HHH, HHL, HLL, LHH, LHL>LLL		HHH>LLL		HHH, HHL, LHH, LHL>LLL	HHH, LHH, LHL >HLH

凡例 P : 既在的自己指向性 DS : 離人感  
 A : 未来的自己指向性 DS1 : 存在感喪失  
 A-P : 世間一般性忌避的な自己指向性 DS2 : 有情感喪失  
 I : イントラ・フェストゥム性 DS3 : 感覚疎隔感  
 DS4 : 自他の接点の疎隔感あるいはノエシス面との接点の消失感  
 DS5 : 二重意識と自己の連続性の喪失感

表3 分散分析の結果のまとめ

	P A A-P I	A×A-P	P×A×I
DS 離人感	○ ○ ○	HH, HL, LH>LL	HHH, HHL, HLL, LHH, LHL>LLL (PAI低) ↓ : HHH, HHL, LHH, LHL (Aが高い場合すべて) >LLL HLL (Pのみ高), HHH, HHL (PAが高い場合すべて) >LLL HHH, LHH (AIが高い場合すべて) >LLL
DS1 存在感喪失	○ ○	HH, HL, LH>LL	HHH (PAI高) >LLL (PAI低) // >HLH (PI高・A低)
DS2 有情感喪失	○ ○ ○	HH, HL, LH>LL	HHH (PAI高) >LLL (PAI低)
DS3 感覚疎隔感	○ ○		
DS4 自他の接点の疎隔感 ノエシス面との接点消失感	○ ○	HH, HL, LH>LL	
DS5 二重意識と 自己の連続性の喪失感	○ ○	HH, HL, LH>LL	HHH, HHL, LHH, LHL (A高) >LLL (PAI低) HHH, LHH (AI高) >HLH (PI高・A低) LHL (Aのみ高) > //

凡例

○：主効果 (H>L)

P：既在的自己指向性 A：未来的自己指向性 A-P：世間一般性忌避的な自己指向性 I：イントラ・フェストウム性

の3者における離人感の高さ自体には差はない。

(3) P×A×Iの交互作用 ( $p<.005$ ) は HHH, HHL, HLL, LHH, LHL が LLL に比して有意に DSが高い (Tukey法)。この結果から以下のことが言えよう。①Aが高い場合はすべて (HHH, HHL, LHH, LHL) 離人感が高い。②Pが単独で高い (HLL) かAとともに高いとき (HHH, HHL) は離人感が高い。③IがAとともに高いときは (HHH, LHH) 離人感が高い。Aの主効果を基本的に支持する一方、その全体的傾向のなかで、PやIの高さによって離人感の高低が左右されている部分も示している。各々の構造のバランスのありかたとして捉えられるようなメタノエシス面のありようによって、同じように離人感が高い場合でもその質的側面は異なることが考えられる。

2) 離人感の質と存在構造との関係

離人感の質と存在構造の関係を調べるため、5因子の各因子得点について P×A×A-P×Iの4要因2水準の分散分析を行い、以下の結果を得た (表2, 表3)。

第1因子 (DS1) については、A, A-Pの主効果と、A×A-P, P×A×Iの交互作用が見られた。A, A-Pの主効果はいずれもHがLよりDS1が有意に高い (各々,  $p<.0005$ ,  $p<.005$ )。A×A-Pの交互作用 ( $p<.0001$ ) は HH, HL, LHがLLに比して有意にDS1が高い (Tukey法)。P×A×Iの交互作用 ( $p<.01$ ) は HHHがHLH, LLLに比して有意にDS1が高い (Tukey法)。

第2因子 (DS2) については、P, A, A-Pの主効果と、A×A-P, P×A×Iの交互作用が見られた。P, A, A-Pの主効果はいずれもHがLよりDS2が有意に高い (各々,  $p<.05$ ,  $p<.05$ ,  $p<.0001$ )。A×A-Pの交互作用 ( $p<.01$ ) は、HH, HL, LHがLLよりDS2が有意に低い (Tukey法)。P×A×Iの交互作用 ( $p<.05$ ) は HHHがLLLよりDS2が有意に高い (Tukey法)。

第3因子 (DS3) についてはP, A-Pの主効果が見られ、いずれもHがLよりDS3が有意に高い (各々,  $p<.001$ ,  $p<.0001$ )。

第4因子 (DS4) については、P, A-Pの主効

果とA×A-Pの交互作用が見られた。P, A-Pの主効果はいずれもHがLより有意にDS4が高い(各々,  $p < .005$ ,  $p < .0001$ )。A×A-Pの交互作用( $p < .0005$ )はHH, HL, LHがLLよりDS2が有意に高い(Tukey法)。

第5因子(DS5)については, A, A-Pの主効果と, A×A-P, P×A×Iの交互作用が見られた。A, A-Pの主効果はいずれもHがLよりDS5が有意に高い(各々,  $p < .0001$ ,  $p < .0005$ )。A×A-Pの交互作用( $p < .005$ )はHH, HL, LHがLLよりDS5が有意に高い(Tukey法)。P×A×Iの交互作用( $p < .05$ )は, HHH, HHL, LHH, LHLがLLLに比してDS5が有意に高い。またHHH, LHH, LHLがHLHよりDS5が有意に高い(Tukey法)。

以上の結果から次のことが言える。

#### 1. A-Pの主効果について：青年期の離人感の全体的特質

すべての因子についてA-Pの主効果が見られたことから、「世間一般性」忌避的な自己指向性(A-P)は5因子に見られるすべての離人感に関わると言える。A×A-Pの交互作用の結果もこのことを支持する。世間一般性忌避的な自己指向性においては、獲得される自己が「世間一般性」を帯びることが自己であることを脅かすため、世間一般性を他として排除しつづけることで自己の自律性や主体性が追求される。しかし、そのことによって、世間を成立させるはたらきと自らを成り立たせるはたらきとを同調できないという側面が、離人感に関わっている。

#### 2. AとPの主効果について：青年期の離人感の二つのタイプ

1.の傾向の上にはあるが、Aの主効果が見られた因子とPの主効果が見られた因子に分かれたことから、次のように、A構造と関わりが深い離人感とP構造と関わりが深い離人感に分けられる。

#### ● A構造と結びついた離人感

A構造と関わりが深い離人感は《存在感喪失》(第1因子：DS1)と《二重意識と自己の連続性喪失》(第5因子：DS5)である。A構造(未来的自己指向性)の尖鋭化は、ノエシス面がより純粋な自己を他に対して差異化し自己限定する動きが強まることで、逆説的にノエシス面が自己限定するに足る差異化ができないため、ノエシスの自己が獲得されず、差異化への動きばかりが尖鋭化するという悪循環を産むため生じる。そのような、ノエシス面が空回りの自らをつかもうとするメタノエシス面のはたらきの意識が「二重意識」であり、ノエシス面が自らをつかんでもつかんでも不全なノエマ面しか産み出せず、自己の方向性が得られない感覚が「自己の連続性の喪失感」であり、メタノエシス面の不全による自他差異化不全によりノエシス的な自己や世界が獲得されない事態が「存在感喪失」であると言える。これらの離人感「他」と「他ならぬ自己」の成立を常に問いつづけ、それらを成立させるノエシス面を追求することで生じる。

#### ● P構造と結びついた離人感

P構造と関わりが深い離人感は《感覚疎隔感》(第3因子：DS3)と《自他の接点の疎隔感とノエシス面との接点の消失感》(第4因子：DS4)である。P構造(既在的自己指向性)の尖鋭化によって、ノエシス面がより純粋な自他差異化に向かうよりは既在的自己としてのノエマ化に傾く。それゆえ、ノエシス面の自己限定というメタノエシス面のはたらきが固定化され、そのつどの新たな自己として獲得され難くなる。そのような、ノエシス面と自他差異化・ノエマ化による自己限定との間のズレが、外界や他者あるいは自らのノエシス面との「接点」にまつわる「不調」として知覚されたものが、身体を通しての外界との接点における味覚・触覚的意味をめぐる《感覚疎隔感》、自他の接点そのものを問題とする《自他の接点の疎隔感》、生命感の消失感などの《ノエシス面と



の接点の消失感》である。

これらはA的な「自己の他者化」という自己の成立の危機は問われないが、根底に「他者の自己化」を孕んでいる。そのため、自己としての実感を失いながらも、自己の存在はどこか自明なものであり、これは、先に見てきたA構造と関わる離人感が自己の根本的な喪失として体験されるのとは、質が異なると考えられる。

● A・Pの主効果の見られた離人感

《有情感喪失》(第2因子)については、A、P両方の主効果が見られた。「リアルさ」や「生き生きした感じ」の消失は、A構造における《二重意識》による疎隔によっても、P構造における既在的自己によるメタノエシス面の固定化によりノエシス面が自己の相で捉えられなくなった事態としても生じうる。この結果は、有情感喪失として捉えられる事態のうち、A構造に基づくものとP構造に基づくものとの異質な両者が、同じ言語表現をとっている可能性を示唆する。

3.  $P \times A \times I$ の交互作用について

《存在感喪失》(DS1)《有情感喪失》(DS2)《二重意識と自己の連続性喪失》(DS5)に、 $P \times A \times I$ の交互作用が見られたことから次のことが言える。

● 全体的傾向について

まず全体にHHHがLLLより高い。後者はどの傾向も鋭化することなくいわば低め安定の情態であり、前者は、ノエシス面と即自的でありつつノエシス面の自己追求指向も既在的自己指向も強い、過剰な自己指向に追い立てられての離人感である。Iの高さはノエシス的自発性の突き上げが強く、ノエシスが自他差異化されずに意識にのぼる傾向が強いことを示している。それはA的なノエシスの自他差異化のはたらきを超えているということでもあり、A的なはたらきを促進する。本来、主客未分な性質のノエシス的自発性が自らをより自他差異化しようとする動きが強まるほど、逆説的に差異化は困難となる。そのいとなみのな

かで産まれるノエマはなかなか更新されない、というPの構造が強まる。結局は、ノエシス的自発性の感覚はどこか圧倒的なのとらえどころがない、という体験となると考えられる。

● 《二重意識と自己の連続性喪失》とAの高さ、およびIの高低との関係について

《二重意識と自己の連続性喪失》は、Aが高い場合(HHH, HHL, LHH, LHL), LLLに比して高い。また、A・Iが高い(HHH, LHH)場合とAのみ高い(LHL)場合は、P・Iが高い(HLH)場合に比して高い。このことは既述したような《二重意識と自己の連続性喪失》とA構造の関係がすぐれて深いことを示す。ただし、Aが高い場合にはIが高い場合だけでなくIが低い場合も含まれる。木村の離人症論はIの突出にともなうA構造の鋭化を前提としており、上述した $P \cdot A \cdot I$ すべてが高い場合はこれに相当し、 $A \cdot I$ が高い場合もこれに準ずる。これらは、ノエシス的な自発性がA的な作用を超えたものとして意識にのぼり、A的なノエシスの自他差異化の動きが促進され、空回りしている状態であり、二重意識の高さはこのような事態によって生じうる。Iが低い場合は、このような過程の二次的な結果ないし潜在的なIの高さとの表裏一体の事態である可能性が考えられるが、憶測の域を出ない。

● 《二重意識と自己の連続性喪失》および《存在感喪失》とP・Iの高さとの関係

また、《二重意識と自己の連続性喪失》はA・Iが高い場合とAのみ高い場合はP・Iが高い場合に比して高く、《存在感喪失》も $P \cdot A \cdot I$ 全部高い場合が(HHH),  $P \cdot A \cdot I$ 全部が低い場合(LLL)とP・Iが高い場合(HLH)より高いことについては次のことが言えよう。PとIが高いことは、ノエシス的な自発性がA的な作用を超えたものとして意識にのぼるが、それがよりデリケートな自他差異化を産む方向よりは、それを「自己」として体験する動きが強いということである。よって自己の「存在感」は揺らぐ、ノエ

シス面が自我親和的であるため二重意識も生じにくい。

● I 構造について

加えて、これら二つの離人感は、A・Iが高い場合は、P・Iのみが高い場合に比して高くなることから、I構造は単独ではこれらの離人感の高さに影響を及ぼさないが、他の存在構造とのバランスによってその高低に関わると言える。

#### IV 結論

木村の存在構造論の視点から、青年期の離人感について質問紙法により検討してきた。その結果、次のことが明らかにされた。

(1)「世間一般性」忌避的な自己指向性(A-P)が青年期の離人感全体に関わる。

(2)青年期の離人感は、「未来的自己指向性」(A)に関わるものと「既在的自己指向性」(P)に関わるものに大きく二分される。前者は《存在感喪失》《二重意識と自己の連続性喪失》であり、「他」と「他ならぬ自己」の成立を常に問いつづけ、それらを成立させるはたらきであるノエシス面を追求することで生じる離人感といえる。後者は《感覚疎隔感》《自他の疎隔と自己の産出面との疎隔》であり、メタノエシス面のはたらきが既在的自己としてのノエマ化に傾き固定化されることにより、ノエシス面とその自己差異化によるノエマ面との間にズレが生じることでおこる離人感といえる。前者は、自己の成立の根本的な喪失が問われる、分裂病親和的な離人感といえる。後者はズレがありながらもノエシス面が自己化されるという「他者の自己化」を孕む、うつ病親和的な離人感といえ、自己の成立は自明のものであるという点で、前者とは質的に異なると考えられる。すなわち、青年期の離人感には、上に述べたような、分裂病親和的な離人感と、うつ病親和的な離人感の、二つの質的に異なるタイプがあると考えられる。《有情感喪失》についてはAとPの両方が関わり、質の異なる体験が同じ言語表現をとつ

ている可能性が示唆される。

(3)Iは単独では離人感の高さに影響をもたないが、他の存在構造とのバランスによって離人感の高低に関わる。

また、今回の結果のなかで、離人感が高い場合に、Iが高い場合と低い場合があることが示されたが、今後は両者の関係や体験の質の異同についてのアプローチが必要であろう。加えて、従来、抑うつ感情というラベルが貼られてきた体験のなかには、《感覚疎隔感》《自他の疎隔と自己の産出面との疎隔》といった、Pと深く関わる、うつ病親和的な離人感も入っている可能性が示唆される。今後、《有情感喪失》を含め、これらのうつ病親和的な離人感と抑うつ感情との質的な差異についての検討が必要と思われる。

〈付記〉 本論文は、京都大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を、日本心理臨床学会第18回大会において発表したものに、加筆修正したものである。大会当日、座長として労をおとり下さった末廣晃二先生、示唆に富んだ有益なコメントを下さった先生方に厚く御礼申し上げます。また、本論文作成に際し、御指導、御検閲いただきました河合俊雄先生に深く感謝いたします。また、調査にご協力下さった皆様に心より御礼申し上げます。

#### 文献

- Federn, P. (1953): *Depersonalization; Ego Psychology and the Psychoses*. London: Imago Pub. Co.
- 井上晴雄 (1956): 離人神経症における一考察. 精神神経学雑誌, 58, 696-706.
- 井上晴雄 (1957): 精神分裂病における離人症の現象学的考察. 精神神経学雑誌, 59, 531-549.
- 木村 敏 (1974): 妄想的他者のトポロジイ. 木村 敏編, 分裂病の精神病理 3. 東京大学出版会, 97-121.
- 木村 敏 (1976a): 離人症. 現代精神医学大系 3 B 精神症状学 II. 中山書店, 109-143.
- 木村 敏 (1976b): 分裂病の時間論. 笠原 嘉編, 分裂病の精神病理 5. 東京大学出版会, 1-31.
- 木村 敏 (1978): 思春期病理における自己と身体. 中井久夫・山中康裕編, 思春期の精神病理と治療. 岩崎学術出版社, 321-341.

- 木村 敏 (1979)：時間と自己・差異と同一性。中井久夫編，分裂病の精神病理 8。東京大学出版会，115-140。
- 木村 敏 (1980)：てんかんの存在構造。木村 敏編，てんかんの人間学。東京大学出版会，59-100。
- 木村 敏 (1982)：時間と自己。中公新書。
- 木村 敏 (1983)：自己と他者。岩波講座 精神の科学 1。岩波書店，177-214。
- 木村 敏 (1988)：あいだ。弘文堂。
- 松下姫歌 (1997)：青年期における離人感について——存在構造の実証的研究。京都大学修士論文(未公刊)。
- 松下姫歌 (1998)：木村敏の存在構造論について——存在構造尺度作成の試みを通して。京都大学教育学部紀要，44，291-303。
- 松下姫歌 (1999)：青年期における離人感についての研究。日本心理臨床学会第 18 回大会発表論文集(文教大学)，418-419。
- 中安信夫 (1989)：離人症の症候学的位置づけについての一試論——二重身，異常体感，実体性意識性との関連性。精神科治療学，4(11)，1393-1404。
- 小川信男 (1965)：離人症。井村恒郎・懸田克躬・島崎敏樹・村上 仁編，異常心理学講座 (第 2 次) 10，精神病理学 4。みすず書房，1-79。
- 大橋一恵 (1978)：思春期の離人症——「意地」の観点から。中井久夫・山中康裕編，思春期の精神病理と治療。岩崎学術出版社，147-166。
- 新福尚武・池田数好 (1958)：人格喪失感。井村恒郎・懸田克躬・島崎敏樹・村上 仁編，異常心理学講座 (第 1 次) 第 2 部，精神病理学(D)分裂病心性その他の病理(4)。みすず書房。
- 清水将之 (1965)：離人症の疾病学的研究。精神神経学雑誌 67，1125-1141。
- 山中康裕 (1978)：離人症の精神療法過程と女性性。分裂病の精神病理 7。東京大学出版会，99-140。
- 安永 浩 (1987)：離人症。土居健郎・笠原 嘉・宮本忠雄・木村 敏編，異常心理学講座 (第 3 次) 4，神経症と精神病 1。みすず書房，213-253。
- 湯沢千尋 (1992)：離人症の概念をめぐる問題。臨床精神医学，21(8)，1263-1268。

(1999年12月27日受稿，2000年5月24日受理)

---

## ABSTRACT

### A Study on the Sense of Depersonalization of Adolescence

MATSUSHITA, Himeka

Graduate School of Education, Kyoto University

The qualitative aspects of the sense of depersonalization of adolescence were examined from the viewpoint of Bin Kimura's theory of being-structure with the questionnaire method and clarified as follows. The sense of depersonalization of adolescence is deeply involved with self-orientedness which evades *public generality*, and is in this overall propensity classifiable into two general types, one involved with *the self-orientedness toward the future and the unknown*, and one with *the self-orientedness toward previousness*. The former is 'the loss of the sense of being' and 'the double-consciousness and the loss of the continuity of the self', and is a sense of depersonalization caused by the pursuit of the Noesis side which is the function that forms *the other* and *the not-the-other-self*. The latter is 'the sense of sensory alienation' and 'the alienation of the self and the other, and from the producing side of the self', and is a sense of depersonalization caused by the discrepancy between the Noesis and the Noema side, arising from the function of the Metanoesis side becoming inclined toward transformation into Noema as the previous being of the self, and fixated. In this latter situation, *the transformation of the other into the self* is indeed latently present which renders the Noesis side as the self for all the discrepancy, but the formation of the self is unquestioned. In this way the latter is qualitatively different from the former situation, where the fundamental loss of the self-formation comes into question.

**Key Words:** the sense of depersonalization, the theory of being-structure, Metanoesis side

---